茨城県立古河中等教育学校文藝部発行　古河中等瓦版　特別号

古代アンデスからのメッセージ

古河中等瓦版

発行
文藝部
2017年11月
特別号

古河中等

「古代アンデス文明展」が、２０１７年10月21日(土)から翌年２月18日(日)まで、国立科学博物館で開かれる。１９９４年の「黄金の都シカン発掘展」を皮切りに、過去５回開かれたアンデス文明の展覧会の集大成ともいえる。

開会式にて華やかにテープカット

『教科書』では触れない九つの文化

「ミイラのマント」と呼ばれる死者を覆う布は特徴的だと、今回の展覧会の監修者である南イリノイ大学の島田泉さんは語る。マントにはシャーマンが描かれている。一つ一つ違うため、文化の特徴を考察する上で重要な役割をもつそうだ。

南イリノイ大学
人類学科教授
島田　泉さん

乾燥した気候のペルー南部海岸は、布で覆われ埋葬されたミイラや副葬品、織物などが遺りやすい。終盤に展示されている３体のミイラにも注目だ。

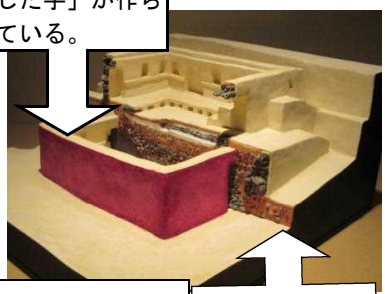
教科書では、スペインが先住民を侵略したというような一文で終わってしまう古代アンデス文明には、約１万５０００年分の歴史がある。文字をもたないその高度な文明が継続したことは、他に引けを取ることがない。謎に包まれた文明の九つの文化の特徴を理解しつつ、アンデス文明とは何かを考える機会としたい。

チリバヤ・バハ遺跡の少女のミイラ

東京大学総合研究博物館助教
鶴見　英成さん

実は、私が作ったんです

1960年、東京大学の発掘チームによってコトシュの遺跡から神殿が発掘された。2014年末、神殿を深く知るため模型を作ることにした。製作期間約３ヶ月。神殿を構築する粘土や石材を再現するため、紙粘土や石を使った。神殿が発見された層からは、土器が発掘されなかったことから、土器のない時代に協力して神殿を作ったことの証明になる。再調査によって、この神殿の下には、まだ複数の神殿が眠っていることがわかった。神殿の発掘は、アンデス文明の根幹の解明につながる。



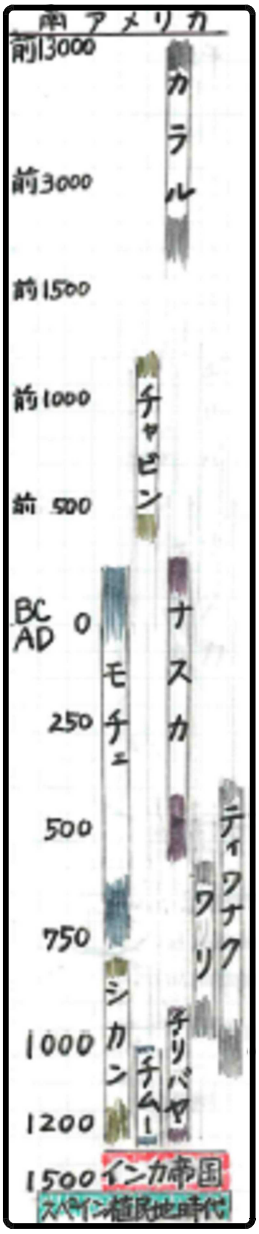
黄金のティワナク

金の儀式用装身具

貴重な展示史料が集まった。中でも、国立科学博物館人類研究部長で、今回の展覧会の監修者でもある篠田さんの一押しは、ティワナク文化の展示だという。すべて日本初公開のものだ。36点の史料の中でも一際目を引くのは、祭祀・葬送・社会的用途に用いられてたという、古代の輝きを現代に伝える金の装身具だ。ボリビア多民族国による協力がなければ実現できなかったのが、今回の展覧会なのだ。

国立科学博物館
人類研究部長
篠田　謙一さん

茨城県立古河中等教育学校文藝部発行　古河中等瓦版　特別号



かわいいものアるンデス

動物型の土製香炉

織物バック

土製のリャマ像

貝殻製ネックレス

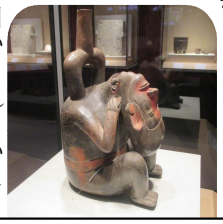
アンデス文明全体を見ると、暖色系でつくられているものが多い印象だ。動物型の土製香炉は光沢を帯び、滑らかな質感を覚える。庭先のプランターとして置いておきたい。ストラップが付いたつづれ織のバックは、現代から見てもおしゃれな模様で、セーターの柄にしても違和感がない。

土製のリャマ像は、つんと尖った耳やつぶらな瞳がまるでウサギのようなかわいらしさだ。足の模様が靴下を履いているようで、見る人を和ませる。背中に乗っている壺のようなものも愛らしい。インテリアとして愛用したい。貝殻製ネックレスは美しい発色と存在感でコーディネートのアクセントになること間違いない。ただし、ひもは髪の毛でできている。金より価値があったという貝殻に注目だ。

ドラマティックな象形

神官を表す
テノンヘッド

アンデス文明の文化に共通の特徴は、白目の多い目だ。迫力のあるその目は強さの象徴で、特にジャガーの目として表現されている。ジャガーは、ネコ科の動物である。また、超自然的な物と人間との間の存在だ。神官と呼ばれていた人々は、幻覚剤を用い、自らがジャガーだと錯覚して超自然的な力を宿そうとしていた。東京大学総合研究博物館の鶴見さんが注目しているというのが、自身の首を切る人物の象形鐙型土器だ。注目のポイントは鐙型だ。持ち歩くための水筒、神殿で酒を飲むための容器として用いたなどさまざまな憶測を呼んでいる。ハンドルとして実用的に用いられていた部品というのが、学生時代から研究してきた鶴見さんの見方だ。まだまだ解明されない謎多きアンデス文明。古代へのロマンは尽きない。

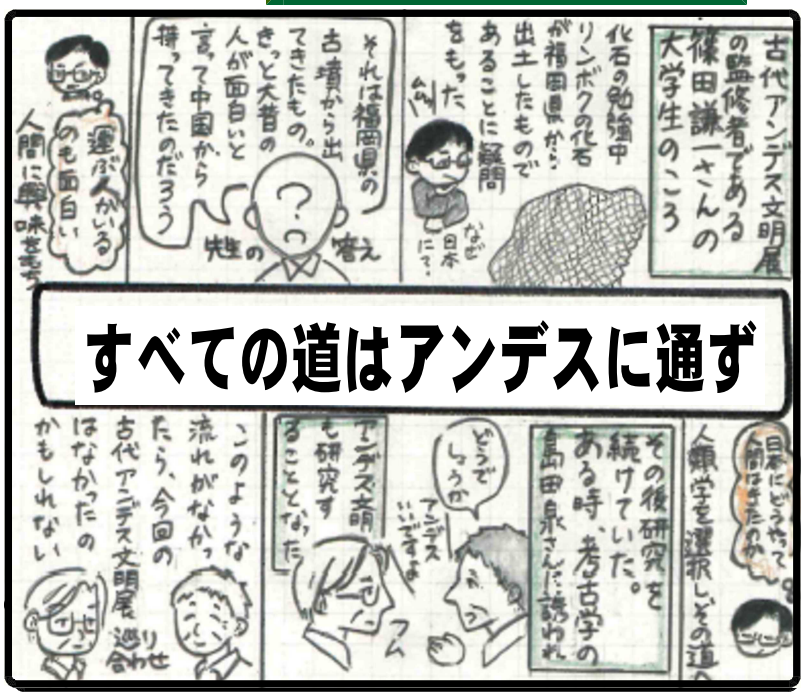

自身の首を切る人物の象形鐙型土器

縄文　弥生　古墳　徳島県長岡安鎌倉室町

来場者と奇跡の出会い

国立科学博物館
動物研究部長
倉持　利明さん

『深海展２０１７』の監修者であった国立科学博物館動物研究部長の倉持さんと再会した。「アンデスの民は乾燥地域や山岳地域という厳しい状況で生きてきた。だからこそ、文明が生まれるのではないか」と、感想を語ってくれた。

「ジャガイモが好物なので、アンデス文明には親近感があった。」というのは、取材に来ていた、群馬県立富岡高等学校新聞部の１年生３人組だ。「一番心に残ったのは、文字をもたないということ。ひもだけで情報を伝えられていることに驚いた。」と語った。

群馬県立富岡高等学校
新聞部のみなさん